

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# シスターナ 白銀のエルフ

小説 黒井弘騎

挿絵 あめいすめる

第八章	第七章	第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章
墮落	狂宴	倒錯	對決	宿業	契約	魔神	妖精

## 登場人物紹介

Characters



### シスフィーナ

生き別れの弟を探し旅を続けるハイエルフの美女。高潔で誇り高い性格だが、不器用で素直になれない一面も持つ。

### ルシェル

シスフィーナの弟と瓜二つの外見を持つ魔神。魔神とは思えない、優しく純粋な性格の持ち主。

### レゼリア

真聖カルアノス教団最高幹部の一人。強力な魔神を下僕として使役する邪悪な魔女。

### ユリアーノ

シスフィーナの弟。姉思いなハイエルフの少年。

ツから浮き出したクレヴァースに宛がわれた怒張は、肉溝にその身を埋めたまましゅつ、しゅつと力強く前後運動を始める。

「う、ひくううう!? いやあ、こんな……激しッ……いい! ふ、ひいあああ〜!」

薄布一枚で守られた最も敏感な器官を、太い肉槍が容赦なく擦り立てる。いままでの前戯で狂うほどに高められていた性感を直接的に刺激され、凄まじい快感が身体を焼いた。ショーツ越しに肉裂を穿られ勃起したクリトリスを刺激され、激しい肉悦が迸る。しどけなく広げられた両股をピクピクと悶えさせ、倒錯の麗女は股間に迸る熱さに感溺した。

「や、やめてユリアーノお! こんな……か、感じすぎて……ふあ、いい……!」

華奢な肢体をしならせ、甘い声を上げて身悶えるシスフィーナ。四肢を拘束されているのに腰が地面から浮くほどの激しい悶えように、ドレスに乳首を浮かせている双乳も激しく上下した。ふるんぷるんと揺れ弾むドレスの胸元に、新たな少年の手が伸ばされる。

「ふん……やっぱり偽者はわかってないな。姉さんは、こっちのほうがいイ感じなんだよ!」

「や……はつつああああ!? な、なにを……あ……やっ!」

右胸に伸びてきた手にドレスの胸元を掴まれたかと思うと、次の瞬間には皮を剥くように生地をずらされていた。剥き出された右胸は激しい興奮に紅潮し、じつとりと汗に塗れて芳しい牝臭を放っている。ピンピンに勃起した桜色の乳頭は、切なげに震えていた。

「大きくはないけど、本当に綺麗だよ。ボク、姉さんのおっぱい大好きなんだ……!」

「や……むねはあ……あ、触られ……はひい、ひいひいっ!？」

乱れた呼気に合わせて弾む美肉峰に、なにかが触れた。ドレスをずり下げた手によって摘まれ揉まれるものと予想し、そして密かに期待していたシスフィーナだったが、予想と反して触れてきた物体の熱さ是指などではありえなかった。太く硬く、そしてねっとりとした臭液に包まれた熱い肉塊——その質感は、いま股間で感じているものと同じだ。いきり立った弟のペニスが、充血しきって痛いほどにしこっている肉豆に押し当てられていたのだ。敏感すぎる乳頭を苛む熱量に、シスフィーナは首を振って感じ入った。

「はああ、ダメ……! いやあ、乳首……乳首にい、当たって……あひい、ひい……!」

胸乳に押しつけられたペニスが激しいピストン運動を始めると、張り詰めた肉豆から痛いほどの愉悅が迸った。ピンピンに勃起した乳頭を引き千切られてしまうのではないかと思えるほどのパワフルな動きに、シスフィーナは銀髪を振り乱し肢体を捻って悶え狂う。

「違うね。姉さんは口から飲むのが一番好きなんだ……ほら、好きなだけ飲んでいいよ!」  
自分勝手に語りながら、また別のペニスがシスフィーナに近づいた。だらしなく半開きになって涎を流している朱唇に、先走りに濡れた肉棒が突きつけられる。

「あっひいひいお……やあ、はむうう……! んちゅ、おくちはらめえ……っはむ、ン!」

口では拒絶しながらも、乱れゆく美妖精は熱いペニスに自ら舌を絡めてしまっていた。淫らな舌遣いで腐肉塊をにちにちゅと舐め回すと、媚薬をたっぷり含んだ分泌液が吐き

出され、麗女の体内に染み込んで狂った官能をさらに煽り立てる。激しくピストンする肉塊が口から離れようとすると、無意識のうちに舌を絡めてそれを放すまいとしてしまう。

「ふふ、やっぱり姉さんは嘘つきだね……昔から知ってたよ？ いつも強がって、素直になれないんだよね……ふふ、そんな可愛いところも大好きだよ！」

——あ……ユ、ユリアーノ。わたしのこと……す、好きって……ああ、夢みたい……！  
ずっと待ち望んでいた、夢のような一言——『大好き』という告白に、残り僅かな理性は跡形もなく消し飛んだ。心を縛る枷を破壊されたシスフィーナは、自分のことを愛してくれる弟にすべてを委ね、至福に満ちた肉悦への道を迷うことなく突き進んでいく——ユリアーノがたとえ何人いたとしても。

「ん……ぶあ。わ、わたひもお……お！ ね、姉さんもほすひよユリアーノお……あ、愛しへるほお！ だ、だかはあ……も、もっほ……もっほ気持ちよくしてへえ……！」

ぺろぺろと肉飴をしゃぶっているせいで、くぐもった声しか出せない。それでも、甘蜜を放つペニスを放したくなくて、シスフィーナはどもった甘声で弟におねだりした。禁断の想いを吐き出した口に悪魔の媚毒が塗り込められ、エルフの理性が壊れていく。

「ふふ……燃えちゃって。姉さんは、本当にチンポに目がないね……ほら、ほら！」

「大勢から一緒に犯されるのが好きなんて……弟として恥ずかしいよ、本当！」

口々に肉奴隷を罵倒しながら、いままで遠巻きに周りを囲んでいた何人ものユリアーノ

が己の欲望を姉の肉体にぶつけまくる。しなやかな太ももにも、両手を上げているせいで丸見えになっている腋下にも、乱れる麗女の肢体にあますところなく無数の肉蛇が集まり、獣欲のままに肌を責め犯し牝肉を味わって動きまくる。剥き身に晒されている右乳と違って、青いドレスに包まれたままの左胸に、生地の上から熱い肉塊が押しつけられた。

「ボクはこのドレスがいいな……さらさらして綺麗でさ。汚らしい淫売の肉なんかより、よっぽど気持ちよさそうだよ！」

「あぶう……ひや……ん。そんなこほいわないへ……あぶあ、早ふしへえ……しへえ！」  
 尊厳を辱める、高貴な麗女にとって最も許せない罵声すら、いまは嬉しくてたまらない。甘えるように悶えながら、シスフィーナは弟の望みのままに左乳を捧げた。上体を捻って美乳を震わせると、薄い布をピンと突き上げて乳首にペニスが擦れ、じれったいような虐悦が迸る。愛する弟をもっと感じたくて、妖精は淫らに身体を振りまくった。

「ボクはドレスのスベスベもいいけど、姉さんのむちむちしたイヤらしい肉も嫌いじゃないからなあ……ああ、どうせならドレスも肉も一緒に味わおうかな……くくく！」

ずぼっ！ はだけられた右胸のドレス生地と肉肌との隙間に、横から太い亀頭が埋められた。邪悪な弟の思惑どおり、シルクのさらさらした肌触りと柔らかな腹肉が、同時にペニスを受け入れる。あまりの心地よさに激しく突き込むと、余計にドレスがめくられて皺ができた。めくられていくシルクを追撃するペニスは妖精の腹上を蹂躪し、臍の穴にまで亀頭

を埋め込んで動きまくる。甘辛い快樂に、シスフィーナは身を振ってよがりまくった。

「お、おへそお、気持ひいひ！ も、もっほお……ユリアーノお、もっほしへえ！」

汗と涎を飛び散らせながら首を振りたくり、浅ましい嬌態を晒すハイエルフ。肉悦の虜と化した美妖精は、もう戻れないところまで墮ちてしまっていた。

「ボクは顔が好きだ……雪のように綺麗な姉さんのほっぺた、どろどろに汚してあげる」  
新たに迫ったペニスが、エルフの左頬に打ち込まれた。柔頬を抉られるような痛みからマゾヒスティックな愉悅を感じ、シスフィーナは身体をくねらせてよがり狂った。

「あ、い、いひのお……乳首もお、お臍ほ……ほっぺもアソコも、全部気持ちいひ！ こ、こんなのお……わたひ、お、おかひふなっひやう……あつ、くひいひい……ッ！」

大量の媚毒に狂わされ、鋭敏な性感帯と化している身体を硬い肉具で擦り立てられ、全身に無数の肉悦が迸る。股間もおっぱいも太もももお口も腋も、すべてが気持ちいい。女虜囚はいつの間にかくねくねと腰を振り、銀髪を振り乱して全身で快樂を貪っていた。

「ふふ……もう十分おかしいよ姉さん。くくく……もつと狂わせてあげる……！」

シヨーツ越しに一番敏感な秘所を責めていたペニスが、いったん動きを止めた。その代わりに伸ばされた指によって、愛蜜塗れのシヨーツが捻り上げられる。くちゃあ、と恥ずかしい水音を立てながら、下着の内側に籠もっていた漏液が太ももを伝って床に零れた。

——あ……や！ 一番恥ずかしいところ……ユリアーノに、見られちゃう……！



股布をずらされ露わにされた恥所を見られまいと、シスフィーナはなんとか太ももを閉じようとした。だが、数人の少年にがっしりと拘束された両脚は動かさず、弟の視線を遮ることはできない。守るもののない聖地を、弟の視線がねつとりと舐り上げた。

「うわあ……なにも生えてないじゃないか！ 姉さんのアソコ、まるで子供みたいだね？」  
「ひ、ひやあぁ。そ、そんなこほ言わないでへ。ふぁ、恥ずかしひのお……んぷう」

コンプレックスを抱く無毛の秘花を愛する弟に揶揄され、シスフィーナは羞恥の炎に身を焼かれた。耳まで真っ赤に染めた美貌を左右に振り、恥辱に悶える麗女。狂った官能はさらに燃え上がり、半開きの肉唇はトロトロと涎を流してひくついていた。

「ふふ……凄いな。姉さんのアソコって、こんなにイヤらしかったんだ……ふふふ！」

「い、ひやあ。そんな……そんなこほお……あはあぁあ、いひ……っ！」

いったん引いていた腰が再び突き出され、太い肉凶器が濡れそぼった淫花に宛がわれる。剥き身の秘所にペニスを突きつけられ、シスフィーナは思わず腰をくねらせ身悶えた。羞恥快樂に蕩けたハイエルフは、早く男を受け入れたくて、淫らに腰を振りたくった。

「ふふ、そんなによがって……入れて欲しいの？ でもさぁ、姉さんみたいな淫売の汚いオマ○コになんて、ボク入れたくないな……ほら、姉さんには、これで十分だろ!?」

いやらしく言い放ち、ユリアーノは再び腰を押しつけてきた。だが、悪戯な弟は淫乱な姉の願いを叶えるつもりはない。開閉を繰り返して貪欲に肉棒を求める淫花の欲望を満た

そうとせず、剥き出しの性器に擦りつけるだけの物足りない愛撫が続いた。

「あ……や、やはあ。い、入れへよお……んぶあ！ お願ひ、かき回ひへええ……っ！」

蕩けた蜜壺に望みのものを入れてもらえず、生殺しの状態にされて、シスフィーナは牝犬のように淫らな願いを口にした。だが、股間を責めるペニスにはやはり挿入してもらえず、せっかくの太肉棒も淫裂を擽るだけで本当の快楽を与えてはくれない。ピンピンに充血した肉豆を擦られるのは気持ちいいが、そんなものでは淫乱妖精は満足できなかった。自ら腰を使って啜え込もうとするも、拘束された体勢ではそれも叶わない。焦らされて満ち足りない欲求は素股の快楽によってさらに増大し、乱れる妖精をさらに狂わせていく。

——こ、こんなの……物足りない。わたし……もつとユリアーノが、欲しい……！

もつと確かな快感が欲しくて、もつとメチャクチャにして欲しくて、シスフィーナは不自由な身体を限界まで振って自ら快楽を求めた。上体を捻って頤を逸らすと、頬を責めていたペニスが外れ、ぬるりと滑って長い耳に当たった。

——あ、はああっ!? 耳につ、当たつてえ……い、いいっ！ すぐく、感じるう……！

その瞬間、脳の中にまで伝わってきた痺れるような激感に、シスフィーナは涎を流して陶酔した。ハイエルフの象徴たる尖り耳は、人間の何十倍もの精密な器官だ。無数の神経の集中したそこは、当然外的刺激に恐ろしく敏感だった。魔毒に身体を焼かれ心を狂わされた肉人形にとって、そこはまさに、性器にも勝る敏感な快楽器官と化していたのだ。こ



れこそ、シスフイーナが求めていた極上の肉悦だった。

「み、耳い……いひい、氣持ひいひよお！ 姉さん、すごふ感じるからあ……もっほ、もっほ責めへえ！ お願ひユリアーノお……もっほ犯ひて……イ、イカせへえええ！」

首を限界まで振りたくり、ペニスに長耳を擦りつけるシスフイーナ。敏感すぎる器官で感じられるドクドクした肉棒の脈動も、脳の中に響いてエルフを惑わせる。ペニスをしゃぶりながら長く尖った耳で快樂を貪るハイエルフの姿は、あまりに淫靡で卑猥だった。

「凄い乱れようだね……普段のかっこいい姉さんからは考えられないよ。ふふ、じゃあそろそろいくよ。赤ちゃんみたいなアソコに、ボクのをたっぷりとぶっかけてあげるよ！」  
股間を擦りまくっていた肉蛇が、さらに強く押しつけられ、激しく震えた。

どぼぼぼ！ 熱い粘塊が麗女の肉花に吐き出される。僅かながら胎内に侵入した媚毒が内側から女エルフを犯し、入れられてもいないのに子宮が痙攣した。それと同時に、耳に押し当てられていたペニスも、ビクビクと痙攣を始めている。

「ふふ、耳が好きだったなんてね……あはは、大したハイエルフだよ姉さんは！」

「あ、あひい……だ、出ひへえ！ 姉さんの耳ひい……ぐ、ぐひやぐひやにしへえ！」

どぼ、どぼどぼどぼ！ 求めていたペニスが、大量の白濁を耳の中に注ぎ込んできた。敏感すぎる器官を熱い汚濁に焼かれ、耳の中にまで快樂液を注がれて、シスフイーナは嬌声を上げてよがり狂う。蜜壺からどぼどぼと大量の愛液を垂れ流し、大きく開けられた唇

蜘蛛糸で宙吊りにされたハイエルフは、縛り上げられた手首と足首を支点にして、振り子のようにぶらぶらと虚空で揺れていた。紫色のドレスに包まれた両乳房は重力に引かれて垂れ下がり、薄生地を押し上げてピンピンに勃起している乳首を真下に向けている。愛液と小水に濡れた股布は真下に向き、汚臭を放つ混合液をびちゃびちゃと地面に滴らせている。そのため、しなやかに反らされた太ももの間は隠すものをなくし、無毛の秘裂が大きく晒されてしまっていた。そこから伸びる精液風船は肛門から生えた尻尾と同様にだらしなく垂れ下がり、プラプラと揺れて敏感なエルフの両肉穴を苛み続ける。

「や……あ。こんなあ……レゼリア……な、なにを……なにを……？」

度重なる絶頂と陰惨な仕打ちの数々に、さしものシスフィーナも反抗心を挫かれかけていた。情けない声で暗黒司教に問う宙吊り奴隷の瞳には、明らかに怯えの色が濃い。

「はぁ？ なにって、お仕置きに決まってるでしょう！ わたしを満足させられないような愚鈍な駄犬には、しっかりと罰を与えてあげないと……ふふ、この子みたいにねえ！」

レゼリアの声に、一人の少年が姿を現した。醜悪な魔神たちの中にあつて、一際美しい白磁の美貌。女性かと思ふばかりの華奢な肉体にはなにも着せられておらず、雪のような美肌は夜闇の中でもはつきりとわかった。銀色の髪が、月の光を受けて妖しく輝いている。

「な……ル、ルシエル……！」

「……また会えたねシスフィーナ……ふふ、牝豚に相應しい格好だ。似合ってるよ……」

吊り上げられた自分の真下にまで歩んできた少年に、驚きの声を上げるシスフィーナ。だが、少年の反応は冷たく、そして悪意に満ちたものだった。金銀に輝く瞳に無垢な優しさはなく、暁の魔王の名に相應しい邪悪な傲慢さが宿っていた。

「こっちにおいてえルシエル……ふふ、わたしの可愛い、従魔……」

「は、はい……あ、レゼリア様……そこ……っ！」

甘えるような声で呼ばれ、妖瞳の美少年は少女司教の下に歩み寄る。

細い肩に手を回したレゼリアは、白い手袋に包まれた細指を少年の股間に伸ばした。だが、未勃起の陰莖に指を添えられて扱かれても、ルシエルは嫌な顔一つせず、甘い嬌声を上げ身悶えするのみだ。蕩けきった至福の表情から、少年が法悦を覚えているのは明白だった。

「なっ……ル、ルシエル!? いったいどうしたの……目を覚まして!」

「目を覚ます? そつ、それは貴女のほうだシスフィーナ……っん! レ、レゼリア様はね、ボクらにこんなにも優しくしてくれる……ああ、す、素晴らしいお方だよ! あ、貴女も逆らわずに……ん、レゼリア様に仕える悦びに……め、目覚めるべきだ……!」

悶え混じりの信じられない言葉に、エルフは細目を大きく見開いた。

よく見れば、少年の華奢な身体には痛々しい鞭打ちの痕が数多く残っている。魔神ならばこのような傷を治すことは訳もないはずだが、そんな彼の力を封じるほど、レゼリアの

魔力は強大なのだ。自分に対して罵声を浴びせたのも、彼女によって洗脳されていたがゆえのことだろう——暁の魔王は、他の従魔たちと同様に、いまや完全にカルアノス司教の軍門に下っていた。

「あふあ……い、いいですレゼリア様あ……ボ、ボク……幸せです……うっ！」

被虐の嬌声を上げ、勃起させられた巨肉棒から先走りを垂れ流して悦ぶルシエル。

淫靡にして扇情的な光景の前に、麗女の心に激しい感情が湧き上がる。魔女に対する憎悪、魔神に対する憐憫——だが、一番強い想いは、彼女自身考えもしなかった感情だった。

——ああ……ル、ルシエルが……あいつに……レゼリアなんか……い！

それは、自分が純潔を捧げ、心を通わせた少年を他人に奪い取られたことへの敗北感と——狂おしい、嫉妬だった。最初は、弟と同じ姿と声に心を乱された。だが、彼の優しく純良な人柄に触れ、その純真さに心打たれ、そして自分の弟への真摯な想いを理解してもらえたことで——シスフィーナは、自分でも気づかない間に、ルシエルという存在そのものに惹かれていたのだ。

「ル、ルシエル……う。か、帰ってきてえ……ルシエルうう……っ！」

その想い人が、憎い敵に心奪われ、至福の表情を浮かべている。弟と同じく、もう手の届かない場所に連れ去られてしまった少年が恋しくて、シスフィーナは哀しげな声で少年の名を呼んだ。大切なものを失った喪失感に、気丈なエルフは涙まで見せてしまっている。

——ああ、ルシエル……ああ、あんなに……あんなに気持ちよさそうに……いい。

だがその一方で、切ない空虚を満たすように、奇妙な欲情が麗女の胸に湧き起こっていた。魔女に弄ばれ性悦により狂っているルシエルの姿を見てみると、心が高ぶって身体が熱くなってくる。二人の絆を踏みにじられる行為であるはずなのに、彼の悶える姿を見ると、秘壺の奥がじくりと疼いてしまうのだ。

度重なる快楽に墮落しかけたエルフの心は、嫉妬の炎でさらに制御を失い、愛する人の悶える姿に劣情を抱くまでになってしまっていた。

魔少年を虐めながら、煩悶するエルフを横目で見やり、レゼリアは悪魔のように唇を吊り上げる。この二人が種族の違いを超えて惹かれ合い、互いを思いやっているのは、沼沢地での戦いの様子からわかっていた。だからこそ、悪辣な魔女はこの少年を支配下に置いたのだ——嫉ましいほどに美しいハイエルフの麗女を完全に墮落させる、最後の鍵として。

「聞いてよルシエル、この女つたら、ペットのくせにわたしに逆らうのよ……お前と違って頭が悪いのかしらねえ？ くくく……出来のいいお前からも寝てやつてくれないかなあ？」

「んっ！ は……はいい。レ、レゼリア様……必ずや、期待に応えてみせます……う」

肩とペニスに添えられた手が離れると、ルシエルは宙吊りにされた麗女の背後にゆっくりと回り込んだ。それと同時に、高所に麗女を吊り上げていた蜘蛛魔神は器用に糸を繰り、



剥き出しの秘所がちょうどルシエルの腰にくるように高さを調節する。なにも下着を穿かされていらない下半身が晒され、無毛の恥部が愛する少年の視線に炙られた。

「すごいな……シスフィーナのアソコ、子供みたいにツルツルなのに、こんな太いのを咥え込んで……ヒクヒク動いてる。ひよつとして、まだ物足りないのかなア？」

「そ、そんな……あっひっ、あっひいい〜！」

少女司教に甘えていたときは豹変し、悪魔のように冷酷な顔を見せるルシエル。生白い異物を咥え込んだ肉唇に指を這わせると、はみ出た粘膜を赤い爪でカリ、と擦ってやった。暁の魔王の誇る快樂魔力が膣内に染み渡り、怖いほどの肉悦が麗女の子宮を焼き尽くす。愛する者の指で発情恥肉を弄られ、シスフィーナは涎を垂らしてよがり狂った。

——ああはああ、ルシエルの……指い……いい。うああ、き、気持ちいいよお……！

身を焼く快樂とともに、一抹の安堵がエルフの心を満たした。ユリアーノはもういない。だけど、ルシエルにはまだ触ってもらえる、こんなに気持ちよくしてもらえる。たとえ辱められようとオモチャにされようと、切ない喪失感に狂ったシスフィーナにはそれが堪らなく嬉しかったのだ。愉悦の証に、とろみきった子宮は湯気立つ淫蜜をたらたらと流している。

「ああ……また溢れてくるじゃないか。やっぱり、まだ足りないんだね。本当に淫乱で貪欲な牝犬だな……でも安心してよ。今度は、これも入れてあげるからね」

元主人の恥知らずな嬌態を前に、少年のペニスがむくむくと亀頭をもたげた。レゼリアに嬲られてすでに完全勃起したと思われていた魔神の肉根が、さらにもう二回りも大きくなり、ドクドクと禍々しい鼓動を打つ。カルアノス司教の従魔となったことでさらなる力を与えられたのか、魔王の剛根はハイエルフとの契約の際よりも太く長く長く進化していた。もはや凶器としか呼びようのないそれを、少年はゆっくりと麗女の秘門に宛がっていく。

「や……!? だめっ、やめてっ！ そ、そんなのもう入らないっ……ダ、ダメえ……！」

赤子の腕ほどもある軟体ミミズ一匹だけでも子宮はばんばんなのに、そのうえ恐ろしいほどに怒張した魔神の剛猛を受け入れられるはずがなかった。恐怖に駆られたシスフィーナは必死に身体を振って身悶えたが、蜘蛛糸で両手と両脚を交差させられ宙吊りにされた姿勢では為す術がない。麗女の怯えた動きに合わせて、寄生尻尾がふるると揺れた。

「ふふふ……いくよシスフィーナ……！」

「い、いやああああ……ダメエ、あー！ いや、あつあああああつあ——！」

じゅぷ、じゅぷじゅぷじゅぷ！ 精液袋を咥え込んだままの陰唇を力ずくで押し割り、極悪な肉牙が麗女の膣口に突き立てられる。凶猛なる侵入者によって肉風船は極限まで押し潰され、辛うじて破れなかった軟質表皮がキュッと圧迫され肉壁に密着した。まったく余裕のない膣内で無理矢理に隙間を穿ちつつ、超大な肉獣が子宮を蹂躪していく。

——う、ル、ルシエルのお……ふっ、太すぎるう！ はああ、に、二本も……二本も入

れられてえ……わ、わたしい……し、死んじやうう……！

尻穴にも膣道にも太い肉ミミズを咥え込まされ、すでにシスフィーナのおなかは張り詰めていた。そこにさらなる巨塊を力づくでねじ込まれ、壮絶な圧迫感が腹腔を満たしていく。長い銀髪を振り乱し、シスフィーナは狂ったように悶えまくった。

「ふ……ふふふ！ さすがにきついなあ！ くく、でも、悦んでもらえたみたいで嬉しいよシスフィーナ。ほら、もつと動いてあげるから……思う存分泣き叫びなよッ！」

バックから麗女を串刺している少年は、激しく腰を使い始めた。柔らかな肉風船とはまったく違う、硬質な灼熱の巨大槍によって肉壁を擦られ、膣壁が一枚一枚めぐり上げられる。絶頂時に吐き出しきれなかった愛蜜がかき出され、泡混じりの淫粘が接合部から滴った。

「はひっ……いいい！ ダメえ……こ、こんなの！ やつ、すごお、すごすぎるうッ！」  
あさましいエルフの嬌声を聞きながら、少年は一心不乱に腰を使い続けた。ダイナミックに突き込まれ、また引き抜かれるペニスの律動に合わせて、薄皮越しの精液がタプタプと攪拌される。剛根に押し潰され不規則に歪む風船が、肉牙とともに肉襞を擦り上げた。男茎の硬い感触と、軟体表皮の粘質な触感を同時に膣内で味わわれ、壮絶な肉悦が子宮内を駆け巡る。シスフィーナは頤と背を仰け反らせ、涎を流してよがり狂った。

「ふふふ……燃えちゃって。あなたたちを見てたら、わたしも興奮しちゃったわあ……！」

幼声に欲情を滲ませ、レゼリアは自ら虜囚の眼前まで歩み寄ってきた。まくり上げたドレスの裾から露わになつている股間には、巨大な異物が鎮座している。司教の魔力によるものか、それとも魔神の異能で変質させたか——陰核にあたる部分が醜く膨れ上がり、男根の様相を呈しているのだ。魔女の肉茎はルシエルのものより幾分小振りではあったが、赤黒い肉塔は魔王の巨根に負けないほどに滾つて、腹を打たんばかりにそそり立っていた。「あ……レゼリア様……す、素敵です……う」

その姿を目にし、魔少女に心酔する少年従魔は媚びた声を上げた。その甘えた声に嫉妬心を擦られ、シスフィーナは鋭い視線で眼前の魔女を睨みつけた。

「怖い顔しちゃダメよシスフィーナ……ほら、ペットとしてわたしに奉仕しなさい！」いきり立った怒張を朱唇に押しつけられ、シスフィーナは咄嗟に唇をきつく閉じた。過去、未来、弟、そしてルシエル——自分からなにもかもを奪った怨敵に奉仕するなど、絶対にしたくない。反撃も許されない状況でも、妖精虜囚は最後まで抵抗するつもりだった。「ふ、んぐ、むぐうう……！ い、いやあ……はふああ、んっ……ちゅむう……っ！」

だが、先走りに濡れた太い亀頭で円を描くように唇を擦りつけられると、麗女の意味に反して甘い声が漏れ出てしまった。憎くてたまらないはずなのに、ドクドクと脈打つレゼリアのペニスが、とても愛しいものに感じられてきてしまうのだ。柔唇に汚辱を塗りたくられ乱暴に亀頭を押しつけられた末、とうとうエルフの唇は自ら開き、赤黒い肉塊を美味

そうに喉奥まで呑み込んでしまった。淫惨な凌虐の嵐に、氣丈だった麗女の心は壊れかけ、無様に虐められ罵られることにマゾヒスティックな快感を覚えるようになってしまつていたので。涎塗れの口腔内に、きつい牡の味が広がっていく。

——や……わ、わたし……こんな女のを……あはあ、で、でも……おいし……い……！

氣づいたときには、勝手に舌が動いていた。美味しい甘蜜を搾り取ろうと舌が蠢き、柔らかな頬肉がまるで膾擗のように蠕動する。快樂漬けにされたエルフの口腔は、男根を悦ばせるための咀嚼運動を勝手に始めていた。自分の淫らな反応に煩悶しつつも、憎い女の精液を啜る動きが止められない。嫉妬と憎悪に燃えていた碧眼はいつの間にか媚びた牝のように潤みを帯び、頭上の司教に物欲しそうな上目遣いの視線を送つてしまつていた。

「あらあらあ？ さつきまであんなに反抗的だったのに、突つ込まれた途端に嬉しそうにしちやつて……舌まで使つて舐めてるの？ほんと、淫乱なハイエルフねえあなたは！」

「んむう、ふぐうううううう——!？」

淫欲に逆らえず、必死に舌を使つて精液を舐め取る妖精に罵声を浴びせると、レゼリアは自ら激しく腰を振つて牝犬の口を責め犯した。凌辱棒は柔軟な口腔粘膜を抉つてはその柔らかさに打ち震え、膨らんだ龟头から濃厚な先走りを滴らせハイエルフのお口を汚しまくる。口の中に満ちていく媚液混じりの牡味甘露が、エルフの理性をドロドロに溶かし、辱めていく。

後背から蜜壺を貫いていたルシエルも、主に負けない勢いで腰を叩きつけシスフィーナを責め立てた。前後から極太凶器で串刺しにされ、激しい肉打ちを連続して喰らわされ、宙吊りにされた肢体が振り子のように揺れまくる。

壮絶な二本挿しにガクガクと震える膣内で、肉ミミズが前後だけでなく上下にも揺さぶられ、溜まった精液がたばたばと水音を立てた。ただひたすらに虐痛と魔悦を送り込まれ、もう正気を保ってられない。恥辱と快楽に狂った子宮はざわざわと膣壁を蠢かして肉棒を締め上げ、際限なく快楽を貪りまくった。

「くっ……また締まってきたよ！ レゼリア様のを舐めながら、ボクのもこんなに美味しそうに啜え込んで……本当に誰のチンポでもいいんだね貴女という人は！」

——や……そ、そんな！ わたしい……ル、ルシエルが……ルシエルのことが……！

愛する人にかけてられた心ない言葉に、エルフの胸が切なく痛んだ。壊れかけた精神の中でも辛うじて残っている純真な心が、銀髪の麗女に否定の言葉を述べさせる。

「ち、ちがふう……キ、キミだからよふお……ルシエル！ キミが好ひだからあ、こっ、こんなに感じてるのお……。キミのだからあ……あああ、い、いひのよお……っ！」

言ってしまったから、ハイエルフの長耳が恥ずかしそうにピクピクと震えた。だが、嬌声混じりの愛の告白にも、魔女の傀儡に墮した魔王は冷酷な態度を変えようとしなない。

「ふん……尻軽な女は嫌いなんだよ。それに、ボクにはレゼリア様がいればなにもいらな



い」

「あらあ、可愛いこと言うわねエルシエル……ふふ、じゃあご褒美よ……んちゅっ」

と、麗女には見えない背中の上で、濡れたもの同士が触れる音がした。エルフを挟んで向かい合っている二人が上体を伸ばし、奴隷の真上で、熱い接吻を交わしているのだ。

「あ……う、嬉しいですマスター……んちゅ……ちゅ……」

快楽に蕩けた媚声とともに、貪欲に唇を交わす音が聞こえる。自分には見ることができない、しどけない媚態を身近で感じさせられ、妖精の心を嫉妬と敗北感が狂わせた。

——ル、ルシエルが……感じて……。ああ、わたしも……し、したい……！

自分の身体はオモチャのように廻って弄ぶだけなのに、憎い女とは愛の籠もった接吻を交わしている——狂おしい嫉妬の念と同時に、自分も同じようにルシエルと接したいという欲情が、純真なハイエルフから最後の正気を奪り取った。

「ふ、ふあああぐう！ ふん、ふううううー！」

やるせない激情に駆られ、シスフィーナは必死に身体を振った。自分に差し込まれているルシエルの肉棒をより感じようと、腰を振りたくって暴れまくるハイエルフ。激しい身悶えに合わせて銀髪が振り乱れ、垂れ下がった二本の尻尾がふるふると揺れた。情痴に狂った浅ましい姿からは、エルフの気高い誇りは欠片も感じられない。

「ふふ、いい感じに乱れてきたわね。さあ仕上げよルシエル、そいつの正気を消し飛ばし



て、被虐の悦びを教えてあげなさい……わたしがお前にしてあげたのと同じようにね！」  
主の意図を汲み、ルシエルは膣門から垂れ下がった肉ミミズを鷲掴みにする。少年の巨肉によつてただでさえギチギチに張り詰めているところをきつく握り締められ、中の精液が高圧力で袋の先端に送り込まれた。腸内で風船のように膨れ上がった肉袋が、ペニスとともにエルフの粘膜を擦り上げ圧迫する。だが、一気に増した膨張感に逆らうように、虐悦狂いの子宮はきゅんと締まり、二本の肉塊を愛しげに咥え込んだ。

「う、くく……また締まってきたよ、どうなってるのシスフィーナ！ こんなにいっぱいにされてるのに、まだボクのチンポが欲しいのか……この恥知らずの淫乱牝犬め！」

「あ、はひい！ らつてえ、ルシエルのがあ、す、すごふへ……んふう、感じるふう〜！」  
愛する少年の罵倒でさえ、いまのエルフにとっては嬉しかった。おなかの中が破れそうなほどに張り詰めて、気が狂いそうなほどに苦しいのに、それでもルシエルを感じられるのが幸せでたまらない。快楽に蕩けきった牝犬の表情でよがりながら、腰を振りたくって肉悦を貪るハイエルフ。巨大な肉棒が膣肉で脈動するたび、甘美な墮落の充足感が心を満たす。

「すごいよシスフィーナ……ううっ！ ふ、ふふ、たっぷりと中に出してあげる……ッ！」  
どぶ……どっばあああああ！ 肉袋を押し潰しながら激しく腰を振っていた暁の魔王も、ついにその欲望を爆ぜさせた。超大な剛直のサイズそのままに、桁外れの量を誇る灼熱が

狭隘な膺内を満たしていく。愛しい相手の放った凌辱液の熱さと激しさに敏感な粘膜を犯され、快楽に狂った麗女の意識も天国への階段を急速度で駆け上がった。

「あつはあ……ル、ルシエルう……う、嬉しひよお……！ んはあ、イ、イふう……わたしひい、ル、ルシエルのでイッひやうううう——っ！」

背中を何度も痙攣させ腰を振りたくり、垂れ下がった胸と尻尾を揺らして全身で絶頂快楽に耽溺するシスフィーナ。胎内に詰め込まれたおぞましい子種袋の脈動と、口の中に溢れ返る牡の美味、そして、膺内を満たす愛しい凌辱の証拠——幾多にも絡み合う異常な状況が、聡明なエルフからすべての現実感を剥ぎ取った。彼女の中で、なにか大事なものが音を立てて壊れていく。だが、快楽に狂った牝犬妖精は、そんなことにすら気づかない。いまのシスフィーナにとつては、いまだ勃起したままの少年に突き込まれる感覚と、その快楽によりがり狂って押し上げられた甘美な絶頂感だけが、世界のすべてだった。

「あひい、はひい……あ、んむぶう。むちゅう……はむ、んむう……」

甘美な絶頂の階段から下りられないハイエルフは、汗塗れの顔を紅潮させ、いつまでも身体を痙攣させている。壊れた麗女は、鼻だけで荒く呼吸しながら、お口を満たす肉飴をむちゅむちゅと噛み締め、浅ましくも可愛らしい媚態を宿敵に曝け出していた。

「ふふ、イヤらしい顔に蕩けちゃって、もう立派な奴隷の顔ねシスフィーナ。そうよ、本当に美しい存在は、この世にわたし一人で十分……あなたには牝犬がお似合いなのよ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**